

---

## 「信州大学と藩文庫」

信州大学人文学部准教授

山本 英二

信州大学附属図書館松本合同図書館には、大学の前身である旧制松本高等学校をはじめとして、松本女子師範学校郷土資料・多湖文書、信州大学文理学部所蔵資料など、昔から教育県として全国に名を馳せている信州において、地域に根ざした高等教育を展開してきた歴史を物語る和漢書および近世古文書が収蔵されている。

なかでも多湖文書は、松本藩戸田家の家臣として、代々藩校崇教館の教授を務めた多湖家に伝わった蔵書と古文書である。和漢籍および文書群の特徴は、17世紀における戸田家の松本藩転封以前の美濃国加納、山城国淀、志摩国鳥羽時代から始まり、19世紀後半の明治維新に至るまで、約200年近くにわたり、多湖家の歴代当主が収集・編纂した和漢書や松本藩の出版物、同家伝来の漢籍稿本および未定稿、往復書簡類などから構成されている。もともと多湖文書は、戦前に書籍は松本市立図書館の所蔵に、文書類は松本女子師範学校の所蔵となり、長野県松本女子師範学校編『郷土研究資料目録』（長野県女子師範学校、1936年）に「松本藩儒臣多湖家旧蔵古文書」として収録されている。しかし現在松本合同図書館が所蔵する文書は、その一部であり、残念ながら松本女子師範学校から信州大学に移管される際に、散逸したのもも少なくないようである。

さて多湖文書は、これまで未整理のため公開されてこなかったが、今回その一部を初公開することになった、きわめて貴重なものである。展示では、天保12年（1841）、多湖安元校訂「澹斎長沼先生行状」を出品した。本書は長沼流の兵法書で、木活字で出版された珍しいものである。また本学以外に所蔵を確認されない貴重本である。

ほかに松本女子師範学校旧蔵文書からは、弘化4年（1847）3月に発生した善光寺地震関係の史料を展示した。この時の地震は、善光寺の開帳と重なっていたため、甚大な被害となったことが知られている。今回展示した「天変一夜の湖」「弘

化四年大地震并山崩大火水押人死田畑水損」は、どちらも犀川が虚空蔵山（岩倉山）の崩壊によりせき止められ、自然のダム湖を形成、19 日後に決壊して、善光寺平から遠く越後国にまで二次災害をもたらした様子を描いた絵図である。ほかにも松本高等学校旧蔵の冊子本「信濃国大地震火災水難地方全図」も展示した。すべて信濃国内で作成、出版されたもので、地震史料としてのみならず、地方出版物としても重要である。

また「信府松本十景句集」「信州松本図」も松本女子師範学校の旧蔵である。とくに前者は、明和 3 年(1766)に成立したものであり、山家桜花・宮村夜燈・今町茶店・放光蓮池・新橋鶴飼・念来時鐘・筑摩納涼・西山残雪・雌羽瀑布・浅間温泉という松本の十景を題として詠み合った句集で、極彩色の絵が添えられた豪華なものである。また近世の浅間温泉や美ヶ原温泉、雪の槍ヶ岳を描いた挿絵は、時期的に見ても早いものに属する。くわえて同書には、俳号と実名を対照させた紙片が添えられており、俳句を庶民の文芸と見る通説とは異なり、当時の松本における俳壇が松本藩上級武士や城下の有力町人によって構成されていたことがわかる。

ほかに信州大学文理学部によって収集され、所蔵されるにいたった仮名草子「恨の介」と奈良絵本「太子開城記」を展示した。「恨の介」は、古写本としては現存するもののなかで日本最古に属する。「太子開城記」には、信州出身で、戦前に文部唱歌の作詞者あるいは文学者として活躍した高野辰之の旧蔵であったことを示す「斑山文庫」の蔵書印が捺されている。挿絵はすでに失われているが、金切箔や砂子・金泥等で装飾を施した豪華な造りの室町時代物語の写本である。「恨の介」は古典文学大系の、「太子開城記」は室町時代物語集成の翻刻底本に採用されている。

このほか新制国立大学の発足当初は、戦後の混乱もあってか古書の移動が激しかったらしく、松本合同図書館の和本には、当該時期に収蔵されたと目される、小汀利得・水谷不倒・関根只誠・横山重などといった著名なコレクターの蔵書印を持つ和書が散見される。これらの書物は、かつて信州大学に在籍した文学者で俳人でもあった東明雅により収集あるいは寄贈されたものと考えられ、同氏の高い見識をうかがわせる。

このように、今回展示された信州大学附属図書館松本合同図書館所蔵の和本は、蔵書全体からみれば、ごく一部に過ぎない。しかし和漢書および古文書の大半は未整理のままであり、今後の整理の進展により、さらに貴重な発見が期待される。